様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　７ 日現在

機関番号：１４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４８２８

研究課題名（和文）小学校におけるWell-Beingを視座とした集団適応行動に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Group Adaptation Behavior from the Well-Being Perspective in Elementary School

研究代表者
相澤　雅文（AIZAWA, MASAFUMI）

京都教育大学・教育創生リージョナルセンター機構・教授

研究者番号：１０５１５０９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，集団適応に困難をかかえる児童の社会性発達のプロセスに影響を及ぼすWell-Beingについて示唆を得ることを目的とした。「あなたの楽しみ・安心・やる気についてのアンケート」を作成し，児童の非認知的側面の視点から調査を行った。
児童は「楽しみ」としていることは「学校」より「家庭」に依拠する傾向があり，その傾向は学年が進むにつれて強くなることが示された。児童の楽しみは学校においても，家庭においても「友達と遊ぶ」ことが最も多い回答であった。また「安心」においても「友達といること」が多かった。家庭や学校において，友達との関われる時間を大切にすることが求められることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学校現場では，集団適応に困難をかかえる児童への対応が喫緊の課題となっている。児童が健康に生活を送ることはその解決の糸口になるのではないかと考えた。そこで児童の「楽しみ」や「安心」についてのアンケートを作成し調査を行った。
児童が楽しいと感じていることは「学校」より「家庭」に依拠する傾向があった。その傾向は学年が進むにつれて強くなることも示された。児童が楽しいと感じることは学校でも家庭でも「友達と遊ぶ」ことであった。また「安心」においても「友達といること」が多かった。こうしたことから，家庭や学校において，友達と関わり人間関係を育む経験を大切にすることが重要であることが示された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to obtain suggestions on Well-Being that influences the process of social development in children who have difficulty in group adaptation. We created a "questionnaire about your enjoyment, peace of mind, and motivation" and conducted a survey from the perspective of the non-cognitive aspect of children.
It was shown that children tend to depend on “home” rather than “school” for what they say “enjoyment,” and that tendency becomes stronger as the grade progresses. The most popular answer for children was "playing with friends" both at school and at home. Also in terms of "safety," there were many cases of "being with friends." It was shown that at home and school, it is required to value the time spent with friends.

研究分野：特別支援教育

キーワード：児童期　集団適応　特別支援教育　楽しみ　安心　Well-Being

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

子どもに，その社会の中で生活していく上で適切だと考えられるモデルを示し，子どもの社会性発達のプロセスに影響を与える人々や制度を社会化のエイジェント(socialization agent)と呼んでいる。乳児や幼児の生活が主として「子どもー親」，または「子どもー教員」といった縦の関係を主軸に営まれることに対して，児童期はそこに子ども同士の仲間関係が加わるようになってくる。Harris (2000) は「集団社会化説」を示し，社会化のエイジェントとしての仲間関係の機能への関心を喚起している。子どもが社会化のための行動規範として獲得すべき内容は，仲間関係が決定し子どもに伝達する役割を果たすとしている。すなわちLadd (1990) や本郷（2006b）が指摘しているように，児童期は社会性発達に影響を及ぼす社会化のエイジェントとしての機能が親子関係から仲間関係へと移行していく時期といえる。

日本では学齢期になるとほとんどの子どもが小学校に通学し，一日の活動時間の大半を同年代の仲間たちと過ごすようになる。平林(2006)は，児童期以降は学校で過ごす時間が長くなるため，学校での児童同士の関係や児童と教師との関係が重要になると指摘している。言うまでもなく学校は人間が築いてきた文化・伝統を学ぶ場としてだけではなく，社会性発達を促していく場としても重要な役割を果たしてきた。Dewey は，『学校と社会』（1899/1957）の中で「学校は小さな社会だ」と表現し，学校はその地域社会の縮図的な要件を構造として内包しているとの認識に立ち，地域社会に向けて集団生活の経験を積み重ねることが学校の重要な役割だとの見解を述べている。学校は他者との関係の中で，ルールに従うことや他人と関わるための能力や社会的コントロールの発達，あるいは社会的価値観の獲得といった社会性発達において重要な体験を積み重ねていく場なのである（Hartup, 1989a,1989b; Parker & Gottman, 1989 ; Kupersmidt & Coie, 1990; Espelage & Swearer, 2003)。

このように社会化のエイジェントとして仲間関係が果たす役割のあり方に注目が集まる中で，集団適応に困難をかかえる子どもの支援については，個人だけでなくその個人を取り巻く人的環境の特徴を把握し，その調整を行うことが重要と考えられるようになってきた（本郷，2006a)。それは，学級集団の中で個に対する支援を意識しつつも，児童の成長・発達に即した「児童－児童」,「児童－教師」といった相互作用の中から，問題の背景を理解することが求められているということである。

小学校の学級集団の根本的な成り立ちは，同じ年齢発達にある子どもに効率的に学習指導を行うことを目的として編成される。基本的にその構成員は学校側が一方的に編成するためフォーマルな集団ということができる。しかし，時間経過に伴って徐々に同じ学級集団に所属している子ども同士のかかわりは深くなり，相互に影響を及ぼし始めるようになる。やがてはその中に仲良しグループといったようなインフォーマルな集団が現れる。子どもはこのようなフォーマルな集団とインフォーマルな集団の中で，問題解決方法の模索をしたり葛藤したりするなどの経験を経ることで，集団適応するための情動表現や情動の自己調整力を獲得していくのである。すなわち集団の中での友だちとの関係を通しての自己探究や，情動的な成長の支えになる文脈が供給されること，そして小学校の学級集団に適応感を感じているのか否かということが，社会性発達に極めて重要な影響を与えることとして認知されている(Ladd, 1990 ; Ladd et al.,1990; Ladd & Coleman, 1997;Bush & Ladd, 2001)。

小学校（通常の学級）に在籍し，知的側面について顕著な遅れが認められないにもかかわらず 集団適応が難しい児童への対応が教育現場では大きな課題となっている。例えば，東京都教育委 員会の「小学校第 1 学年の児童の実態調査」(2009)では，東京都の小学校の 23.9%の校長が「入学後の落ち着かない状況がいつまでも解消されない」といったように，児童期に達しても情動や 行動の自己調整が難しい学校不適応行動が起きていることを報告している。 小学校の臨床では集団適応が困難な児童には大きく分けて２つのタイプが認

められる（相澤，　2012）　。１つ目のタイプは，攻撃的ないしは非協調的，自己中心的な児童である。他人の権利や感情を顧みない行動があり，仲間から拒否されたり回避されたりしやすく，好意的な社会的関係を育みにくい。外在的問題行動と呼ばれる。２つ目のタイプは，消極的，内向的な児童である。仲間からの働きかけへの反応が鈍く，対人関係に不安を生じ，社会的な場面を回避しようとすることから，やはり好意的な社会的関係を育みにくい。内在的問題行動と呼ばれている。このような児童は，日常的に「できない自分」の繰り返しにストレスを感じたり，自尊感情が低下したりすることから，集団に疎外感を感じるようになる。そうした児童は，Well-Being の実現が疎外されることにつながり，集団適応がより一層困難になっていくと考えられた。

２．研究の目的

本研究で取り上げようとしている集団適応とは，複数の児童と大人が存在する生活の場である小学校の学級集団の中において，子どもが様々な社会的関係を結び，それを基盤として社会性発達が促されるための有利な形質を獲得することと考えている。すなわち実験的に構成された１対１の場面ではなく，子どもが日常的に生活し，子どもにとって様々な文脈が存在する場である学級集団において「児童－児童」,「児童－教師」の相互作用をとらえることが児童の生態学的妥当性を確保することにつながり，子どもの社会性発達の展開の過程を明らかにすることにつながると考えている。

児童期において，集団にうまく適応できずに十分な社会性の発達が達成できない児童に対する支援の在り方は，学校教育の観点からだけではなく，発達心理学においても重要な課題となっている。以上のような点から，本研究では小学校の下学年と上学年の児童の様相を比較し，延いては学齢期の児童期の Well-Being を視座とした集団適応行動の様相が明らかになると考えた。本研究では，集団適応に困難をかかえる児童の社会性発達のプロセスとそのプロセスに影響を及ぼす Well-Being の在り方について，示唆を得ることを目的とした。

３．研究の方法

①　調査対象及び分析対象

小学校に「あなたの楽しみ・安心・やる気についてのアンケート」を作成し依頼した。

（ア）通常の学級に在籍する児童に回答を依頼した。

（イ）学年・性別の記述とし，氏名は無記名とした。

（ウ）「あなたの楽しみ・安心・やる気についてのアンケート」の構成

- 質問１「あなたが楽しいと感じるときはどこで何をしているときですか」：選択（□学校で，　□家で，□その他），及び記述（最大５番目まで回答可とした
- 質問２「あなたが一緒にいて楽しいと感じる人はだれですか」：記述（最大３番目まで回答可とした）
- 質問３「あなたが一緒にいると安心と思う人はだれですか」：記述（最大３番目まで回答可とした）

②　分析　　SPSS を使用し，統計的処理を行った。

４．研究成果

世界保健機関憲章（WHO,1946）の草案に，「健康とは，病気でないとか，弱っていないということではなく，肉体的にも，精神的にも，そして社会的にも，すべてが満たされた状態（Well-being）にあること（日本 WHO 協会：訳）」とある。PISA（2015）による生徒の幸福度調査結果（Students’Well-Being: PISA 2015 Results）によると，学校の一員であることを感じ，親や教師と良好な関係を築いている生徒は，学業成績もよく，幸福感がある生活を送っている傾向が強いことを示していた。

一方で，現在の日本は，大都市への人口集中，コミュニティ内の人間関係の希薄化が進んでいるとされ（髙橋・青木，2010；堂野，2011 など），学校現場においても，いじめや不登校，貧困が大きな課題となっている。

John F.ら(2019)による「World Happiness Report」では，日本の子どもたちの幸福感は，156 カ国中 58 位であった。2018 年から順位を４つ下げている。2015 年は 46 位，2016 年は 53 位，2017 年は 51 位であった。それぞれの国の自己申告も結果の要因に含まれるとのことから，こうした結果をそのまま鵜呑みにすることはできないだろうが，私自身も子どもたちの輝く瞳に出会うことは少なく感じるようになっていた。

児童が，楽しいと感じている時は，家庭が 192（48.6%），学校が 115（29.1%）と有意な差が示された。近年，学校の魅力が問われることが多い。児童が，「学校に行きたい」「学校が楽しい」と感じる，魅力的な学校つくりが求められている。本調査では「低学年」から「高学年」へと学年が進むにつれて，学校が「楽しい」と感じる児童が減っていく傾向にあった。これは憂慮すべきことであろう。児童には主体的・対話的で深い学びが求められている。基礎的な知識･技能を習得しながらも，実際の生活の中でその知識を活用しながら，自分で次の課題を発見し，その解決に向けて仲間と協働して解決に向けての情報収集を行い探究していく学びの姿，これを実現するには，学校という学びの場が楽しさに満ちていなければならないと考える。

本調査では，児童の楽しみとして最も多い回答が「友達と遊ぶ」ことであった。学校はそうしたことを十分に保証する場としての役割を児童も期待していた。「遊びから協働へ」，「協働から学びへ」と結びつけるような取り組みが必要であろうし，何より友達との遊びを保障することが大切であろう。ある地方の農村部の小学校では，少子化から学校の統合が進み，スクールバスを利用して広範囲から登校することとなった。家が遠く，児童同士が帰宅後遊ぶことができないのである。そのため，午前中を 5 時間授業とし，午後に授業を終えてスクールバスが発車するまでの時間を児童同士の遊びの時間に設定する改革を行っていた。

一方で，家庭での「ゲーム」，「テレビ」，「You Tube 等」を合わせると，「友達と遊ぶ」ことと同程度の数になる。「ゲーム」，「テレビ」，「You Tube 等」の数は学年が進むにつれて増加する傾向にあることからも「子ども―子ども」の相互作用を充実させる場を作り上げる意識が必要になると考えられた。学習指導要領で求められているように，学校における授業作りにおいても、児童同士が協働し主体的に取り組めるような内容構成を充実していくことが大切になるであろう。

児童期は社会性発達を育むための掛け替えのない時期である。Dewey が，『学校と社会』（1899/1957）の中で「学校は小さな社会だ」と表現していたように，学校はその地域社会の縮図的な要件を構造として内包しているとの認識に立ち，地域社会に向けた集団生活の経験を積み重ねることが学校の重要な役割とされていた。

子どもたちに，その社会の中で生活していく上で適切だと考えられるモデルを示し，子どもの社会性発達のプロセスに影響を与える人々や制度は，社会化のエイジェント(socialization agent)と呼ばれている。学校は，他者との関係の中で，ルールに従うことや他人と関わるための能力や社会的コントロールの発達，あるいは社会的価値観の獲得といった社会性発達において重要な体験を重ね，獲得していくためにも大切な場なのであった（Hartup, 1989a,1989b; Parker & Gottman, 1989 ; Kupersmidt & Coie, 1990; Espelage & Swearer, 2003)。学校は人間が築いてきた文化・伝統を学ぶ場としてだけではなく，社会性発達を促していく場としても重要な役割を果たしてきた。

日本では学齢期になるとほとんどの子どもが小学校に通学し，一日の活動時間の大半を同年代の仲間たちと過ごすようになる。本調査の「あなたが一緒にいて楽しいと感じる人はだれですか」や「あなたが一緒にいると安心と思う人だれですか」の問において，「友達」が最も多かった。平林(2006)は，児童期以降は学校で過ごす時間が長くなるため，学校での児童同士の関係や児童と教師との関係が社会性発達において重要になるとしていた。しかし，本調査からは「児童―教師」の関係において，児童の教師に対する意識が低く示

されていたことは残念であった。教師の多忙さ，余裕のない生活はかねてから取り沙汰されていたことであった。そうしたことからの影響かとも考えられた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 森美景・相澤雅文	４．巻 第９号
２．論文標題 療育に通う幼児の保護者の意識に関する研究～小学校への移行に関連して～	５．発行年 2019年
３．雑誌名 京都教育大学特別支援教育臨床実践センター年報	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 溝渕葉月・相澤雅文	４．巻 第９号
２．論文標題 ピア・サポーター自身の教育的効果についての検討～ノートテイカーからの意識調査に基づいて～	５．発行年 2019年
３．雑誌名 京都教育大学特別支援教育臨床実践センター年報	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 清水貞夫・相澤雅文	４．巻 第９号
２．論文標題 宮城県下の結核学童の教育保障と病虚弱養護学級－ベッドスクールの宮城県での広がり－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 京都教育大学特別支援教育臨床実践センター年報	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 本郷一夫，平川久美子，飯島典子，高橋千枝，相澤雅文	４．巻 67集
２．論文標題 児童期の情動発達とその特異性に関する研究　－「気になる」子どもと典型発達児の比較－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東北大学大学院教育学研究科研究年報	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石井由依・相澤雅文	４．巻 第8号
２．論文標題 放課後等デイサービスの現状と課題	５．発行年 2018年
３．雑誌名 特別支援教育臨床実践センター年報	６．最初と最後の頁 79-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井上梨沙・相澤雅文	４．巻 第8号
２．論文標題 通級指導教室担当教員のやりがいに関する研究	５．発行年 2018年
３．雑誌名 特別支援教育臨床実践センター年報	６．最初と最後の頁 89-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鷲見玲名・相澤雅文	４．巻 7
２．論文標題 母子分離に不安がある自閉症児に対する支援	５．発行年 2017年
３．雑誌名 京都教育大学特別支援教育臨床実践センター年報	６．最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上野佳奈子・相澤雅文.	４．巻 7
２．論文標題 通常の学級における多層指導モデル（ＭＩＭ）を使用した特殊音節の読みに対する支援の有効性について	５．発行年 2017年
３．雑誌名 京都教育大学特別支援教育臨床実践センター年報	６．最初と最後の頁 67-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 仲田比呂子・山口智慧・田中駿・郷間英世・佐藤克敏・佐藤美幸・牛山道雄・丸山啓史・相澤雅文・井上和久・井澤信三・姉崎弘.	4．巻 7
2．論文標題 特別支援学級における自閉症スペクトラムの生徒の得意な能力を生かすための指導・支援についての調査研究	5．発行年 2017年
3．雑誌名 京都教育大学特別支援教育臨床実践センター年報	6．最初と最後の頁 103-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 相澤雅文	4．巻 6月号
2．論文標題 特別支援教育における授業研究のポイント	5．発行年 2016年
3．雑誌名 実践障害児教育	6．最初と最後の頁 10－11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 相澤雅文、奥住秀之、赤木和重、井澤信三、海津亜希子、 田中敦士	4．巻 39－1
2．論文標題 特別支援教育：これまでの10年，これからの10年	5．発行年 2017年
3．雑誌名 発達障害研究	6．最初と最後の頁 32－37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 本郷一夫・平川久美子・飯島典子・高橋千枝・相澤雅文
2．発表標題 児童期の情動発達とその特異性に関する研究９
3．学会等名 日本教育心理学会
4．発表年 2018年

１．発表者名 平川久美子・飯島典子・高橋千枝・相澤雅文・本郷一夫
２．発表標題 児童期の情動発達とその特異性に関する研究10
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 飯島典子・平川久美子・高橋千枝・相澤雅文・本郷一夫
２．発表標題 児童期の情動発達とその特異性に関する研究11
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 相澤雅文
２．発表標題 「気になる」児童の外的適応・内的適応に関する研究－６年間の縦断的調査から－
３．学会等名 特殊教育学会第 54 回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 相澤雅文
２．発表標題 児童期の情動発達アセスメントの方向性－児童期における内的適応と外的適応の観点から－
３．学会等名 日本発達心理学会 第27回大会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計4件

1．著者名 相澤雅文，牛山道雄，小谷裕実，佐藤克敏，佐藤美幸，丸山啓史	4．発行年 2019年
2．出版社 クリエイツかもがわ	5．総ページ数 163
3．書名 教員になりたい学生のためのテキスト特別支援教育	

1．著者名 本郷一夫，相澤雅文，飯島典子，平川久美子，新藤将敏，小泉嘉子，平川昌宏，澤江幸則，増田貴人，糠野亜紀，八木成和，高橋千枝,，鈴木智子，吉中淳，稲垣宏樹	4．発行年 2018年
2．出版社 遠見書房	5．総ページ数 221
3．書名 公認心理師の基礎と実践12　発達心理学	

1．著者名 金生由紀子，松嵜くみ子，星野恭子，新井卓，相澤雅文，山下祐司朗，星加明徳，野中舞子，岡田俊，濱本優，山室和彦，秋月あや	4．発行年 2017年
2．出版社 日本評論社	5．総ページ数 122
3．書名 こころの科学[特別企画]チックとトゥレット症	

1．著者名 相澤伸幸、神代健彦、相澤雅文、伊藤悦子、伊藤崇達、　平岡信之、　森脇正博	4．発行年 2018年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 128
3．書名 道徳教育のキソ・キホン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考